

(情報共有)(ウチ) 東電(ウチエビ)

(非管理メモ)

会見議事メモ

日時：平成 23 年 4 月 27 日（水）11:00～13:00

場所：東京電力本館 3 階 ABC 会議室

先方：記者約 80 名（カメラ 10 台）

当方：原子力立地本部

原子力設備管理部

原子力運営管理部

本店広報部

配布資料：

- ・ 東北地方太平洋沖地震による影響などについて（4月27日午前9時現在）
- ・ 福島第一原子力発電所における当社職員の被ばく線量限度の超過について
- ・ 福島第一原子力発電所 1～3号機における格納容器旁囲気モニタ計測値に基づく炉心損傷割合の推定値の訂正について
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果（4/26 現在）
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況
- ・ 福島第二原子力発電所モニタリングによる計測状況
- ・ 福島第一原子力発電所仮設モニタリングポストによる定点計測状況
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングポスト空間線量率
- ・ 福島第一原子力発電所プラント関連パラメータ（水位・圧力・温度などのデータ）
- ・ パックボット（packbot）による 1 号機原子炉建屋の現場確認
- ・ 三菱重工製造キャビン付きフォークリフト
- ・ T-HAWK による原子炉建屋周囲の状況確認

質疑：

Q. T-Hawk の映像については、原子炉建屋にカバーを設置するための障害を確認したかったとのことだが、その評価はどうか。

A. 現時点で評価中。

Q. 1 号機原子炉建屋内で測定された 1,120mSv/h は事故後、原子炉建屋内の最高値と理解していいか。

A. 原子炉建屋内で計測した値としては最高と思われるが、確認したい。

Q. SHC ポンプ室とは具体的にどのようなものか。

A. 原子炉停止後、残留熱を除去するために炉内の水を循環させるためのポンプと熱交換機がある。

Q. 今回の測定で他の場所と比べ2桁ほど高い線量となっているが、どう見るか。

A. 部屋の中までよく見ていないのではっきりしたことが申し上げられないが、SHC ポンプは原子炉とつながっていることも踏まえると、配管内に炉水が一部流れているものと思う。

Q. 床面が漏れているなどのことはないのか。

A. 現時点でのような報告はない。

Q. 高線量が計測されたことから、今後の作業に支障があると思うが、工程表への影響などをどう見ているか。

A. 高線量となるので少なくとも当面はこのエリアを経由しての作業は難しく、どこか別のルートを考える必要があるのではないか。

Q. 高線量の理由として、炉水が一部漏れている可能性があるとのことだが、具体的に教えてほしい。

A. SHC ポンプは原子炉と直接つながっているので、ポンプあるいは配管の中に炉水が流れ込んでいる可能性があることを申し上げたもの。なお、部屋の内部までは確認できており、入口の床面に水漏れは確認できていないことまではわかつている。

Q. SHC ポンプ室入口の写真に見える水たまりのように見えるものについては。

A. 異物等により色が変化して見えるのではないか。現時点で、少なくとも濡れているとの報告はない。

Q. 被曝した女性の年齢と作業内容、現在はどこにいるのか。

A. 女性の年齢は50歳代。作業内容は消防関係の業務に従事していた。具体的には免震重要棟内での消防資機材の管理や、消防ポンプ車による注水作業や給油作業をしていた当社社員と委託員への装備手伝いや食料手配等の後方支援。現場には、消防車や業務者への給油作業に同行したときのものである。また、現在は1Fを離れており、2Fのバックオフィスにて勤務している。

Q. 女性職員とは、どこの職員なのか。

A. 当社社員である。

Q. 入院はしていないのか。

A. 入院はしていない。

Q. なぜ今日発表したのか。

A. 23日にJAEAのホールボディカウンターで内部線量の測定・評価を行い、本日午前中に内部被曝の線量と外部線量の合計が5mSvを超えたため、発表させて

いただいた。

Q. SHC ポンプの場所はどこにあるのか。

A. 原子炉建屋 1F、北東部分。

Q. 1号機の注水量を増やしていくとのことだが、増加後に下げる主旨は。また、具体的に水槽のスケジュールにどう影響を与えるか。

A. 注水量を試験的に増やし、原子炉の圧力や水位、D/W の圧力や水位等の各種パラメーターに与える影響を観察、評価して参りたいと考えており、その評価結果によりスケジュール感が見えてくるのではないかと考えている。

Q. 被曝した女性の地震後の被曝線量は特定できるのか。また、外部被曝と内部被曝の内訳は。

A. 地震後の被曝線量は地震前は 0mSv、17.55mSv は地震後の被曝である。外部被曝のうち、2.06mSv が屋外作業等に伴うもの、免震重要に滞在し事務作業をしたことにより 1.89mSv、内部被曝が 13.6mSv、合計で 17.55mSv となる。

Q. 地震発生から何日まで作業されていたのか。

A. 23 日の午前中まで。

Q. 被曝線量について男女差があるのはなぜか。

A. 女性作業員は妊娠期間の可能性を考慮し、別の上限が設けられている。

Q. 内部被曝が突出して高い理由は。

A. 屋外作業ではタイベックス、ゴム手袋および全面マスクを着用し、必要な装備を行っていたが、内部被曝をした可能性がある。また、水素爆発後に免震重要棟内の放射性物質の量が多くなっていた時期があった。換気装置や、出入り口にユニットハウスの設置、床面での養生等の対策を実施してきたが、それらの遅れから免震重要棟に滞在していたことによる内部被曝の可能性もあるかもしれない。

Q. その女性と同じ時期に免震重要棟にいた方は、かなりの確率で高線量の内部被曝があったのではないか。

A. 当時、免震重要棟で働いていた方も含めて内部線量の測定を行っているところだが、現時点で 250mSv を超えた方は出てきていないという暫定評価は出ている。

Q. ホールボディカウンターを実施するタイミングはいつだったのか。

A. 出来るだけ早く実施したいと考えていたが、1F の設備がまだ使えず、台数が足りていないこともあり、結果して 23 日の測定となった。

Q. 細野補佐官が現地の人員が少なく、OBを含めた人員の確保についても言及していたが、実態としてどうか。

A. 線量管理をしつつ、必要な人数を確保するために、OBを含めて声をかけているところ。現場にはまだOBは入っていないが、本社では検討作業のためにOBが入っている。

Q. クールベストの導入の検討状況など、作業員の夏場対策は。

A. 5, 6号機側に40名が休憩でき、飲食が可能な休憩所が完成、運用を開始している。夏場に向けたクールベストの導入などを検討しているところ。

Q. 1号機の注水量を増加させ、現状レベルまで注水量を戻した後にロボットを再投入することは考えているのか。

A. 水の漏洩に関する確認のために、再度ロボットを投入したいと考えている。

Q. パックボットの写真を撮影した順番、ロボット自体の被曝線量は。

A. 確認する。

Q. 1,120mSvという高い線量が確認されたが、配管が原子炉と直接つながっていることから、通常時から原子炉の水が流入していると言うことか。

A. SHCは原子炉停止後、圧力が下がった後に使用するもの。原子炉側とSHC側の隔離弁は閉まっており、通常運転中は水の行き来はない。今回、隔離弁の隙間を通りて配管内に水が漏れて出ている可能性はある。

Q. 高い線量が入ったままで作業を進めることができるのか。

A. 配管の中でとどまっている限り、配管が健全であれば作業を進めることは可能であると思う。

Q. 23日以降は1Fに女性はいないのか。

A. その通り。

Q. 23日までに18人の女性が働いており、16人は大丈夫、2人が調査中のコメントが保安院が行っていたが、どうか。

A. 地震発生当時、女性当時は全部で19名働いていた。19名のうち1名が今回の公表させていただいた方にあたる。16名は内部被曝を含めて限度を超えてないことを確認済、残る2名が内部被曝の調査をしているところ。1週間以内には調査結果が出ると思われる。

Q. 工程表を進めていく上で、残留熱除去系を復活させるとの選択肢もあると思うが、高線量の配管がその選択肢に影響するのではないか。

A. 配管が健全であれば、このルートを使うオプションもあるが、現実問題として、

ここで作業が出来るかという問題があるのではないか。

Q. ホールボディカウンターの実施状況は。

A. 3/31までに 100mSv を超えた 21 人を優先して計測している。なお、21人は暫定値だが 250mSv を超えていないという結果が出ている。

=====炉心損傷割合の訂正について資料配付および説明=====

Q. 訂正となった理由は。

A. 現場からの測定値を免震重要棟で一覧表を作成していたが、その際に転記ミスがあったもの。

Q. CAMS データの再検証したきっかけは。

A. 4/24 にオリジナルのデータと発表したデータに転記ミスがあったことを発表させていただいた。それを受けた CAMS についても再点検した結果、転記ミスが見つかったもの。

Q. 8号機についてはゼロと評価した理由が全く理解できないが。

A. ゼロと評価した理由については確認していくが、方法等がはっきりしていなかったのではないか。

Q. 誰が計算したのか。

A. 確認する。

Q. ゼロとしたのは意図的なのか。

A. 意図的に評価を小さくするようなことはないと思うが、なぜこのようなミスが起きたのかについては確認をする。

Q. ゼロにするといった誤りについてはすべてのデータの信頼性が揺らぐ。全てのデータが過小評価されているとも思える。調査結果については公表していただきたい。

A. しっかりと調査して、結果については公表させていただきたい。

Q. 炉心損傷割合を評価するための CAMS データの採取日時の理由は。

A. 炉心損傷評価するためにこの時間としたと思うが、詳細は確認させて欲しい。

Q. 2枚目のグラフは計算結果なのか推定値か。

A. 解析値である。

Q. データ採取日時によって結果が変わるとことはあると思うか。

A. 評価は変わりえると思う。

Q. 再計算をしていただけるのか。

A. なぜこの時間としたのかについて確認をさせていただく。

Q. 1～3号機は格納予期の容積を超えた水を注入しているが、蒸発量と漏洩量をどう評価しているのか。

A. 現時点では明確な評価は出来ていない。

Q. 蒸発量と注入量と外に出るバランスをとっていると言っていたが。

A. 残留熱による蒸発量は4m³前後でバランスすると考えており、それに対して6m³前後を注入しているところ。

Q. CAMSデータは1, 2号機と3号機のデータ取得時間が違うのはなぜか。

A. この時間の設定については確認をさせていただきたい。

Q. 5%を下回るような小さな値の評価等については、評価経験があまりないから間違ってしまったのか、評価手法やマニュアルはあるのか等も含めて教えてほしい。

A. 確認させていただく。

Q. 1,120mSv/hという高い値が1号機で計測されたが、今後、この値よりも高い線量を計測する場所もあると思うが、どうか。

A. 炉心が損傷しているため、場合によっては高い線量を示す場所があると想定していたが、実際に高い線量があることが確認できた。今後も原子炉建屋内の線量マップを作成するなどして、原子炉建屋内の作業効率向上に努めて参りたい。

Q. この炉心損傷割合だと配管内の水の線量はどの程度と考えるか。

A. 炉心が損傷しているとかなりの線量が出ると考えられるが、配管内として計測された1,120mSとの数値的な因果関係についてはつきりしたことはわからない。

Q. 炉心損傷割合を70%から55%に訂正したが、これまで70%という数字に対して違和感はなかったのか。

A. これだけの損傷状況のため、55%と70%の差がどれだけパラメーターに影響を及ぼすかは不明。

Q. 70%→55%に変わったことで、他のデータが変更される可能性は。

A. 総放出量に関しては原子力安全委員会と保安院で評価されているが、原子力安全委員会は放出された放射能の測定値から逆算し、総放出放射能量を求めているので、炉心損傷割合の変更に伴う影響は少ないのでないのではないか。保安院は原子炉内

の炉心損傷等から計算していると聞いているので、少し影響があるかもしれない。

Q. レベル7の評価は変わるか。

A. 今回、損傷割合が変更されたことによって、総放出量の桁が変わることほど経ると考えにくいので、レベル7の評価自体については変わらないと考えている。

Q. 現場の作業員の被曝は100mSvや250mSvという値をこれまで聞いていたが、女性は低く設定されているのか。

A. 女性に関しては3ヶ月で5mSvと法律で定められており、遵守する必要がある。男性については緊急時の被曝として250mSvとして管理している。女性については妊娠に気がつかない時期の胎児への影響のため定めているもの。

Q. 1号機と2号機 CAMS データが上下していて、現在は状況推移確認中となっているが、最新の値での炉心損傷割合の確度はどうか。

A. 現時点の CAMS データは格納容器の雰囲気線量を計測するために使っている。最新の CAMS データを使って炉心損傷割合を計算すると経過時間を考慮すると炉心損傷度割合が過小評価となるので、最新値での計算は行わない。指示のふらつきがあることは確かなので、この値については引き続き注視していく。

Q. CAMS データの確からしさについてはどうか。

A. 信頼性についてはもう少し評価が必要と思っている。

Q. SHC ポンプ室入口付近の線量だが、配管内が通常時から高い線量が通っているため、計測値も高いのか。

A. 地震発生以降このポンプは停止しており、普通の状態であれば、1,120mSv/hほど高い線量は出ない。今回こういった線量が計測されたことから、炉心から核生成物を含む高い線量の水が流れ込んでいると想定できる。

Q. CAMS データの訂正是 IAEAへの報告は不要か。

A. 私どもとして保安院に報告させていただいている。IAEAには保安院から情報提供するのではないか。

以上